

● 書 評 ●

「移植・輸血検査学」

猪子英俊, 笹月健彦, 十字猛夫: 監修

大谷文雄, 木村彰方, 小林 賢, 鈴木洋司, 徳永勝士: 編

片桐 一

旭川医科大学名誉教授

素晴らしい本が出版された。移植の倫理的基礎から検査の実際までを記載している本邦で初めての専門書であり、長年の研究成果をもとにして要領よくまとめられ、移植医療、輸血医療、再生医療に従事する者に見るべき書である。さらに、本書により現代医学の発展の様子をこの領域を通してたどることができ、医学・医療研究者、学生に将来の医学研究の方向性を示唆する貴重な書であり、一読をおすすめる。

「組織適合抗原(第2章)」では、HLA 抗原群の成り立ちを懇切丁寧に説明しており、そしてそれぞれの分子の構造と機能について最新の知見を交えて記載しており、本邦研究者によるこれまでの成果がこのような整理、解説されたのは初めてである。「血液型(第3章)」では、10種類の赤血球血液型が詳述されており、また最新の知見をもとにして血小板抗原についても記載されている。「移植医療(第5章)」では、現在おこなわれている臓器移植、造血幹細胞移植について、移植片拒絶に働く HLA 抗原等の関与を中心に記載されている。「輸血医療(第6章)」では、輸血の実際に即して記載され、同時に今後の輸血医療の方向性が示されている。

医療への利用には、それぞれの抗原型、血液型を検査する必要がある、現在主流になった遺伝子検査とともに、リンパ球を用いた血清学的検査等について「検査の原理(第4章)」「移植・輸血検査学実習(第8章)」に丁寧に記載されている。

HLA 遺伝子群は高度な多型性を有し、ヒトゲノム中でもっとも個体差に富んでおり、個体識別上の遺伝マーカーとして医学研究に応用されてきた。「ヒトゲノム多様性(第7章)」では、自己免疫疾患と HLA の関連について、これまでの成績をもとにその意義について詳細に説明している。その他感染症の経過、腫瘍細胞の認識排除、これまで HLA と相関が認められた疾患について、病因遺伝子と HLA との関係性を説明している。また、人類集団の成り立ちを血液型、HLA 型を介して説明している。

これまでに進められてきた HLA と疾患との関連の研究は、現在盛んに進められているゲノム医学の研究に先鞭をつけており、本書を読み取ることで、ゲノム医学の将来像を見通すことができるであろう。輸血を含む移植の基礎から検査技術まで詳述された本書を是非一読願ひ、移植医療のレベルアップに貢献していただくことを希望します。